

# 平成 24 年度「BAMIS 研究プロジェクト」成果報告書

報告年月日：平成 25 年 4 月 5 日

## 1. 申請者（代表者）

所 属：体育系（専攻・学系名） 職名：特任助教 氏名：古屋 朝映子

## 2. 申請区分（いずれか一つの番号を選び□の中に記入する）

3

## 3. 取組名称：運動遊具の特性と子どもの自発的な動きの関連性

～遊び方が決まっていない遊具 bilibo は子どもからどのような動きを引き出すのか？～

### （1）研究概要（全体像および目的）

文部科学省が策定した幼児期運動指針（文部科学省，2012）でも言及されているように，幼児期における運動は，主体的な遊戯遊び形態（以下，運動遊びとする）であることが重要であり，そのためには環境の構成に対する工夫の必要性がある。しかし，現在行われている運動遊びは，「何かを指導する」プログラムが多いのが現状である。

「幼児が自発的に体を動かしたくなる環境」を実現するには，運動遊具は大切な役割を担っている。遊具に関する先行研究（高橋，2005）では，幼児が自発的に様々な運動遊びを展開するためには，運動遊具の条件として，適度のリスクを備えていること，多様な遊びを展開できることを挙げている。筆者は，「適度のリスク」は運動遊具の不安定性（＝アンバランス）にあると考え，遊び方が決まっておらず，多様な用具特性を持つ「バランス遊具」である，ビリボ（MOLUK 社，スイス）に着目した（写真 1 参照）。ビリボは，高密度ポリエチレン製の遊具で，耐加重 100kg のため，中に入ったり上に乗ったりと，様々な遊びを展開できる。また最大の特徴は，取り扱い説明書等で遊び方を限定しておらず，使用者自らが使用方法を創造することを重視しているところである。

本研究では，幼稚園（5 歳児クラス）を対象として，できるだけ一斉指導を行わない形式でビリボを使用した運動遊びを実践し，幼児が好む運動内容の傾向を明らかにすることで，幼児が自発的に行う運動遊びプログラム構築のための基礎的資料を得ること研究目的とした。



写真 1 ビリボ



写真 2 使用例 1



写真 3 使用例 2

### （2）実施状況（作業・取組等の概要）

#### 【対象】

茨城県内にある私立幼稚園の 5 歳児 1 クラス 32 名（男児 17 名，女児 15 名）を対象とした。

#### 【活動内容】

活動は，2012 年 6 月 25 日に幼稚園内の体育館で実施した。

対象クラスの幼児に対し，1 人 1 つのビリボを与え，15 分間ビリボを使って自由に活動させた（全体の活動時間は 25 分間）。対象児には，事前に「ビリボは，遊び方が決まっていない遊具であること」のみを伝え，一方的な遊び方の教示は行わなかった。但し，安全管理上，危険な行為に関しては活動を制限した。

#### 【分析の手続き】

活動中の対象児の様子に関してデジタルビデオカメラ 3 台を用いて，3 方向より撮影した。活動児 32 名のうち，記録映像から活動内容が途切れる事なく抽出できた者 29 名（男児 16 名，女児 13 名）を分析対象とした。撮影した映像の分析には，ゲームブレイカー・プラス（スポーツテック社）を使用した。また，参与観察によるフィールドノートを作成し，分析の補助資料とした。

### (3) 具体的な成果

(波及効果、メディアでの引用など、アピールすることがあれば)

活動時間中に出現した「遊び方」に関して、ビリボの使用形態の観点からカテゴリ分類を行なったところ、4つのメインカテゴリ（バランス系・回転系・移動系・遊具操作系）と14つのサブカテゴリに分類することができた。

半数以上の対象児が行った遊びは、バランス系の遊びでは「〇座位」・「U座位」・「〇立位」、回転系では、「U座位回転」、移動系では、「すべらせ」、遊具操作系では、「U揺らす・まわす」・「模倣」であった。中でも、「〇立位」・「U座位回転」・「模倣」に関しては、ほぼすべての対象児において観察された。14個のサブカテゴリのうち、一人当たり平均7.2 ± 1.6個の遊び方が観察された。

各分析対象者における表出時間をメインカテゴリ間で比較した結果では、移動系の遊びがそれ以外（バランス系・回転系・遊具操作系）と比べて有意に少なかった。また、回転系の遊びとバランス系の遊びを比較した場合、回転系の遊びの方が有意に多かった。

以上より、全体では幼児自身が回転する遊び（回転系）と遊具を操作する遊び（遊具操作系）が好まれる傾向にあることが明らかとなった。性別ごとの各サブカテゴリにおける合計表出時間の結果もふまえると、幼児自身が回転する遊び（回転系）では、男女ともにビリボの中に座って回転する遊び（U座位回転）が最も多く観察された。遊具を操作する遊び（遊具操作系）では、男児において、ビリボを揺らしたり回したりする遊び（U揺らす・まわす）が多く観察され、男女ともに、ビリボを用いて模倣して遊ぶ（模倣）姿も多く観察された。

本研究では、5歳児を対象にバランス遊具であるビリボを使用した運動遊びにおいて、幼児がどのような遊び方を好むかについて検討した。その結果、バランスをとる動きだけではなく、回転を伴う遊びや移動を伴う遊び、ビリボを手具として操作する遊び等、様々な形態の遊び方が観察された。また、それらすべての遊びが、「指導された」遊びではなく、幼児自らが「主体的に」発見し、実践した遊びであった。このような結果がもたらされた大きな要因の一つは、ビリボが持つ多様な用具特性にあると考える。本研究は、ビリボという単一の遊具での調査であったが、実際の教育現場においては、ビリボのみならず、幼児の遊び方に対する内的動機を十分に把握した上で、適切な遊具環境を整える必要があると考える。

本研究は、5歳児に限定したビリボ遊具での単一事例の報告であるため、今後は他の年齢および他の遊具での調査が望まれる。また、余談であるが、自発的な運動遊び環境の構築のためには、安全に対する配慮の視点が必要不可欠であるため、安全管理の観点を含めた検討も行ないたい。

\* カテゴリ分類の詳細は、添付資料1を参照のこと。

#### 【研究成果の発表について】

本研究の結果は、第63回に本体育学会、第12回日本体操学会にて発表した。また、本研究の結果については、現在日本体操学会の学術誌「体操研究」に投稿中である。

※必要に応じて図表を添付してください